

伝え続けるために 今、伝統と産業の融合を

鬼北泉貨紙保存会
会長 平野 邦彦

約15年前、鬼北泉貨紙に出会い、
鬼北泉貨紙保存会に入会
その後、平成11年に会長に就任
現在、10名の会員とともに活動している



私が鬼北泉貨紙を知ったのは、私の家の隣に住んでいた、鬼北泉貨紙保存会の第3代目会長・芝忠良氏がきっかけでした。会長に誘われて、紙漉きを初めて体験したのですが、会長のように上手くいかないことに悔しさを感じたのを、今でも覚えています。

それからは、必死でした。紙に生じた不具合、例えば「皺ができた」「傷がある」というのは見たらすぐ分かります。しかし、原因がどこにあるのかというところは、簡単には分からない場合が多々あります。どうしたら上手く漉けるのか。言葉で説明することがほとんどできない世界なので、コツを掴むまでが大変でした。15年経った現在、やっと納得のいく泉貨紙が漉けるようになったなど自分でも思えるようになりました。

泉貨紙づくりの過程は、全てが「感覚に頼る」という感じです。「煮熟」にしても、「川さらし」にしても、もちろん「手漉き」

にしても、全ての工程において原料や紙の状態の微妙な違いを見ながら、作業していきます。ちょっとした違いで、紙の仕上がりに大きな違いが出てくるのです。その奥深さが、泉貨紙づくりの魅力の1つだと感じています。

後継者不足はどの伝統文化でも問題になっていますが、この泉貨紙づくりを受け継いでくれる人がいてくれたらとは思っています。ただ、後継者を見つげるためには、泉貨紙をただの伝統文化としてだけではなく、産業として成り立つものにしていく必要があると感じています。

泉貨紙はその昔、その丈夫さから、張り物や服に使われていた歴史があります。また、一説ではその丈夫さから擬革として使われていたとも言われています。

産業として成り立たせるためには、その利用方法を復活させることが重要ではと考えています。ただの「紙」にお金をかける人はなかなかいません。

ん。しかし、それが服や擬革となったとき、泉貨紙に付加価値が生まれ、関心を引くことができるのではないのでしょうか。また最近では、ユーザーの意見を聞き、そのニーズに応えられる泉貨紙を作るといふ経験をする機会があり、より物づくりの楽しさを実感しています。

しかし、その中でも自分の考える「泉貨紙の範疇」を越えないようにというこだわりは持ち続けたいと思っています。そして、なるべく機械などに頼らず手作業にこだわりたい、品質にこだわっていききたいと思っています。

「どこの誰が作った和紙なのか」そう聞かれるようになることが、私の目標です。

ぜひ皆さんも、泉貨紙の奥深い世界に、一度触れてみてください。

